九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

プラトン『テアイテトス』第一部の問題 : 156a～157cの奥義(μυστήριαι)および158e～160eの感覚＝知識論を中心として

水崎, 博明
第一薬科大学 : 講師

https://doi.org/10.15017/27477

出版情報：哲学論文集. 6, pp.61-78, 1970-09-26. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

プラトン『テアイテトス』第一部[1]の問題

——156a～157cの奥義（μυστηρία）および158e～160eの感覚＝知識論を中心として——

水崎博明

筆者のこれからの『テアイテストス』研究の出発として、テアイテトスの感覚が知識であるというテーゼ（151e）の行方がはらむ第一部の問題を、上の問題意識を中心にすえて整理してみようと思う。

一

知識とは何か。ソクラテスの独特のアポリアと探究（メトドス）[2]に触発されて、若きテアイテトスが答えた解答は、次のようであった。

「それでは、私に思えますところでは、何かを知識しているはたらきにある人は、彼が知識しつつある当のものを感じているのだ、とこんなふうに思えます。そして、ええ、そうです。とにかくも今現われているところからすれば、知識とは感覚に他なりません。」（151e）

この解答は筆者には極めて難しい。いったいこの答で、筆者は何を考え、納得すればよいのか。

「とはいえ、しかしこれは君、説としては容易ならぬやつを、知識について言ってくれたものだね。もっともしかし、それはプロタゴラスもまた論ずるところではあった。とは言え、その論ずる向きは何か別向きで、同じそういっ

た類いのことを言っているというわけだがね。すなわち彼言うには、『あらゆるものの尺度は人間だ。あるものどもの、それらはかくあり、ということの、あらぬものどもの、それらはかくあらぬ、ということの』と主張している。……中略……ところで彼の立論は、何か次の様ではないか。つまり、一方然々ようのものとして各々のものが私にとって現われている、ちょうどそのようなものが、まずこの場合私にとってあるのだ。他方然々なるものとして君に現われている、ちようどそのようなものが、今度はその場合君にとってあるのだ。然るに人間とは君とぼくである。といった論じ方だが。」（152a）

これがソクラテスのつけていく途である。そしてこのプロタゴラステーゼは、同じ風が吹いている時、人は人さまざまに寒さを感じるものであり、その感じをもつ人さまざまに、風はその感じであり、またそういう感じのものとして現われる。とすれば、熱いものといった類のものにおいては、[3] 感じは現われと等しいのであり、そしてその現われは、またそう感じられてあるのだとすると、

「してみると感覚は、つねにありと対応しており、そして感じそこないあやまつといったものでなく、ちょうどそれは知識であるといったふうなのだ」（152c）

という仕方で、もとのテアイテストステーゼへと連絡がつけられることになる。

さてしかし、これで筆者の困難が解決したかというと、それは半々であると言わねばならぬ。というのは、ありと対応し誤たないということが知識の条件である、[4] というそこまでしか筆者は了解できず、ソクラテスのつけた途の未だ半分のところに立たされているからである。すなわち後の半分とは、どの様にして感覚は、そのありとの対応を保証されているか、ということの立証実現まで到達する途である。

無論すぐ様、この途はソクラテス自身によって積極的につけられていく。それによるとテアイテトステーゼへと途をつけようとして——あるいは逆に、それによって触発されて——現われたプロタゴラステーゼはまた、大智者プロ

タゴラスが、凡俗の大衆には謎めかしたが、その真相を弟子たちには秘密のうちに明らかにしたものであって、それは――

「何ものもそれ自体で他とは没交渉に一定のものではない。さらにまた君は、何それともかくかくのともぴったり当てて呼ぶことも望みえない。いな、もし君がそれを『大きい』とかいうふうに呼ぶなら、またそれは『小さい』と現はれ、また『重い』と思ってそう呼べば『軽い』と現われるのであって、一切がまた、あたかも何ひとつある一定のものでも、何それでも、かくかく様のものでもないのだ、という有様なのだ。いやそこはこう。運動（場所を動くこと）と動（一般に動き）と相互に対する混和から、万事は生ずる（なる）のだ。それを！　そう、それを我々はあると呼んでいる。がしかし、これはちっとも正鵠を得てはいないのだ。何故なら、あろうことなどはないのだ。一切合財、いついかなるときも。いな、つねになるのだ――と、こういうふうなのだ。」（152de）――

という実に容易ならざる言論であると言われ、そして

「事これについては、次々とこぞって賢者たちが、パルメニデスを除いては、同一歩調をとっているとしたまえ。プロタゴラスにヘラクレイトス、またエムペドクレス、そして創作家たちの、中でも両種の創作の頂きに位する人々、喜劇のエピカルモス、悲劇のホメロス、すなわちホメロスは――神々の父祖なるオケアノスと母なるテテュス――と物語り、万物は流と動との子孫であると言っている。」（152e）

と言うわけで、何か同じ類の思潮をなした、いわばホメロス指揮下の軍勢の、一将軍なのだとされる。

さてこれで、どんなふうに知識の条件を感覚は満たすと考えられるのか。ソクラテスのつける途は貫通するのか。ソクラテスはその軍勢の思潮を傍証または例証する一二の議論を語り[5]、ひとつのアポリア[6]を介在させたのち、そこでこの流転存在論――こう呼んでみよう――の奥義（μυστήρια 156a3）を、当のテアイテトスに明らかにしながら、途をつける作業を達成しようとする。その奥義はこう開示されていく。

「万有はそもそも動であり、それとは別の何ものでもなかった。だが動には二つ種類がある。その数の多さでは二つそれぞれ無限だが、その機能からは、『なす』をもつものと『なされる』をもつものとがある。そしてそれら相互の交合と摩擦から、なり出る子孫として数は無限だが、しかし一対の双生児、ひとつは感覚されるもの、もうひとつは、感覚されるものとともに常に同時に産み落とされ生まれていくもの、が生ずるのである。……中略[7]……。さてそこで、この物語は、我々が論じているように、そういったすべては先ずは動いている、がしかし、それらのものの動の点で早さと遅さとがそのうち存する、とこう論ぜんとするものの様である。さてそこで、動が遅いものは、同じ場所にいて、近づくものがあると、それらのものと相かかわって、動を維持し、かつそのようにして生むのであるが、生み出されるものは、実にかくして急速なものである。というのは場所を変えて動くからである。すなわち場所の移動ということの中に、それらの動きは、本来そのあり方があるからである。ところで、眼とそれと同尺度(シュムメトロン)のものの中の何か他のものとが接近して、白さ、およびその白さと同時発生(シュムピュトン)の感覚とを生むと、――すなわちこれらは、それら親たちおのおのが別のところへ行ってしまうなら、決して生みはしなかったものなのだが、――その場合には、まさにその時、中間に、眼の方からは視覚、色を同時に生むものの方からは白さ、が運動してきて、かくて眼は視覚に充ちる。すなわち、実にその時こそ視ているのであって、何か視覚といったような固定したものになるのでなく、視つつある目となるのである。他方、色を同時に産み出すものの方は、白さに全面充たされて、また白さといったものにでなく、白いものとなるのである。よしそれが木材であれ石であれ、またそのものの色がそのような色でもって彩どられることが結果するものならば何であれ。そして、他のものどもについてもまたかくのとおり。……」(156ae) というふうに。

そして――感覚が知識だと言っても、夢と現実との区別があるのではないか、錯覚というものがあるではないか――というような、ごく普通に思いつかれる疑問にたいしても、――いや夢にせよ錯覚にせよ、その時々にそこにいあわ

せている思いなし（τὰ ἀεὶ παρόντα δόγματα 158d）を、これこそ何よりもまがうことなきありのまゝだと、我々の心は押し通そうとするものだ。黒白をつけるとしたら、それは結局、押しとおす時間の長短ということしか考えられないであろうが、それもまた奇妙なことだ。――というわけで、この問も未解決のまゝ残され、やはり、その時々に思われるものはそれが思われるものにとっても真である、とされる。そうしてそのような真理論が可能だという次第が、次のようにソクラテスによって紹介される。――

全く異ったもの、それは似ていないものとも呼べるが、その異ったものは、同一の機能（なす・なされる）をもちえない。然るに、健康なソクラテスと病気のソクラテスとは似ていない、つまり異っている。ところで奥義の教えに従うと、同じものでも交わる相手がちがうと異ったものを生むのであるから、酒がその異ったそれぞれのソクラテスに出会う場合、それぞれ異ったものを生む。他方、「ソクラテスは、彼が感覚するものとなる場合には、何かを感覚するものとならざるを得ず、また作用をソクラテスにおよぼすもの（酒）も、それがうまくなったり、にがくなったりする場合には、誰かにとってうまく、あるいはにがくならざるを得ない。」――（文〔A[8]〕）とすると――

「だから思うに、そこで我々に残されているのは、相互にとって――もし我々はあるのだとすれば――ある、もし我々はなるのだとすれば――なる、[9]ことである、我々のあり方を必然がかく結び合わせているが、他方しかし、他のものどものいかなるものにも、さらには我々自身にも、結びつけてはいないのであるからには。だから実にそこでは、相互に結び合わされていること、これが残されているのである。従って、もし人が、何それである、と名づけるにせよ、なると名づけるにせよ、そう名づけるどちらの場合でも、彼その人にとって許される述べ方は、「何ものかにとって」とか「何ものかの」とか「何ものかに関係して」と言った言い方であり、それ自らが自らを土台としたかたちで、あるものにせよなるものにせよ、何それだ、とは、彼その人が語ってはならぬし、他人が語っている場合も許容してはならない。これが思うに、我々の論じ来たった言論の指示しているところである。」（160bc）

ということになり、従って、

「ぼくを相手に能動的に作用しているものがぼくにとってあり、他のものにとってではない時には、その時こそ、ぼくがまたそのものを感ずるのであって他のものがではない。」―（文〔B〕）とされ、次に

「してみれば、かくれもない真なのである、ぼくにとって、ぼくの感じている感覚は。何故なら、それはぼくのもつありのその時その時の感じであるから―（文〔C〕）。だからぼくは、プロタゴラスの説くそのまゝに、ぼくにとってあるものどもの、それはかくあるのだという、またあらぬものどもの、それらはかくあらぬのだという、その判断者（κριτης）なのだ―（文〔D〕）。……中略……ところでいったい、誤ちはずれるということのないものでありながら、すなわち、あるものども、ないしなるものどもをめぐっての思考[10]によってつまづくことなきもの、でありながら、僕は、僕がまさにそれらのものを感ずるものとなっているそのものを知っているものたりえない、などということがありえようか―（文〔E〕）。」（160bd）

というふうに結論され、かくしてテアイテトステーゼは

「ホメロスやヘラクレイトスやその一族によっては『あたかも流れるもののごとく万物は動く』という論が、比類なき賢者プロタゴラスによっては『すべてのものの尺度は人である』という論が、そしてテアイテトスによっては『それらがかくのごとくであるならば、感覚は知識となる』という論が、同じものへと落着したというわけだ」

という仕方で、その背景を描写され、その位置が定まったとされる。

二

しかしながら我々は、このようにしてソクラテスによってつけられた途が、ほんとうにテアイテトステーゼを救うものであるかどうか、ここで検討してみよう。そのために検討を要するのが、感覚はありに対応するから知識に他ならぬ

とされた場合の、その対応の保証は如何という、先に筆者にとっては未解決のまゝ残されていた問であり、そしてその問の解決が、ソクラテスによって流転存在論の奥義と称せられた、〝何かはるかに洗練された人々〟（πολὺ κομψότερον 156a2）の教義、およびその奥義にあずかった上での真理論、この二つを合わせ検討することを、筆者に要求するのである。

そこで先づ奥義の性格について考えてみながら、その検討に着手して行こうと思う。

さてこの奥義は、何か一種出生系譜(genealogia)を物語っているもののようである。そもそも万有は動であった。しかるに……、といったしかたで。しかしここで注目されるのは、純然たる genealogia においては、生まれた子孫（ἔκγονα）が親を変えることはなく、人間の親からは人間の子が、という掌に反復される代々のそれであるのに対して、この場合には、こどもが親を変えているということである。いささか奇妙であるが、奥義の明らかにしているのはそういう次第であって、――同じ場所にあって近づくものに対して動を維持する（τὴν κίνησιν σχεῖν）眼と、それ（シュム）と同尺度（メトロン）のものとが接近すると、その中間に、眼から視覚が、石、木材などからは白さが、急速に運動して、眼は視覚に充ち、[11] 視覚にではなく見ている眼となり、石や木材などは、白さにではなく白いものになる、――と語られる時、そもそも動であった万有は、突如見ている眼、白いものとなるのである。つまりこれは、誰それが誰それを生んだ、という出生系譜であるよりは、女が子を生んで娘から母となる、そういう一人の人生の系譜ないし年譜とも見られよう。すなわち、見ている眼（母）は、なされる眼（娘）によって説明されているわけである。

ところでどうであろうか。我々の立場からすると、たしかに娘はいつかは子をなして母となるであろう。だからそこに何らかの動なり変化なりが認められるとするのは、理解できる。しかしその動と変化とを通じて、同一の女、生む性をもつもの、が存在していることも、確かだとしなくてはならないのではないか。従って、娘だったから母となったといくら説明しても、そのなりを説明したことにならぬ、何故ならそれでは論点を先取した議論である、女の同

一性に頼った議論である。こんなふうに非難することも可能かも知れないから。とはいえしかし、彼らの側からしてみれば、万有は流転し何ひとつ自己同一のあり方をするのではない、のであるからして、そういう論難を我々に許さないであろう。そうすると、また逆に、何ものの同一性にも頼らずしかもありに対応するには、どうしたらよいのか。奥義の genealogia はまことに精妙きわまるものであらねばならぬだろう。というのは、彼らの言うごとく、一切が流転しているとすれば、到底何それであるなどとは言えぬはずであり、それ故ありとの対応ははかられず、知識はなりたたないことになるであろう。従って、逆にもし知識の成立をはかるなら、彼らの根本前提を幾分なりとも修正しなくてはならぬはずだ、というようなディレムマがあるのだが、彼らは根本前提をとったまゝ知識の成立を主張するからには、そのディレムマを二つともとることによって解かねばならぬからである。

さて筆者には、そのために奥義の凝らした工夫は、万有は流転するとしてもしかしそこにおいて何かが生じはしている、というその点で、ありとの対応をはかることであった、とこう思われる。すなわち、万有はそもそも動であったにしても、それはなしたりなされたりして生むための出会いなのだ、という所にその解決を見出だそうとするのである、と。しかしながらこのことは、我々の立場に立てば、万有流転にとっては、すでに大きな修正ないしスキャンダルだと言ってよいかも知れぬ。何故なら、すでに一定の仕組みが一定の目的のために要求されているから。とはいえしかし、彼らにしてみれば、要するにただ生みはする、まさにこのことだけが言えるための、いわば見合が仕掛けられればよいのである。その後子どもが成育するかどうか、子どもをどう養育すべきか、といったような、またしても子どもの同一性を考慮せねばならぬような思考をもちこむことは、一切不要かつ不可能なのであって、万事は「なりつつ」「なされつつ」「亡びつつ」「変じつつ」（γιγνόμενα καὶ ποιούμενα καὶ ἀπολλύμενα καὶ ἀλλοιούμενα 157b）あるのだと心得ればよいのである。だがこういった点が、いかにも厄介なことになるだろう。何故なら、一方何かが生みはされて万有流転の世界が成立するためには、なすーなされるという仕掛けは、その保証としてあらねば

ならず、しかも他方、その保証によって生みはされた世界では、何ものもあるとはされないのであるから。つまり何ものもありはせずとする世界がその身分証明のために、仕掛けのありを要求しているのである。その上なお、この世界で知識が成立しなければならないのである。奥義は何かこのようなアポリアを内蔵してゐるといってもよいだろう。そのアポリアは、恐らく、生みはするということが、同時にそっくりそのまゝ、滅びもする、ということを裏腹にもたねばならぬ、当の仕掛け自身にあるであろう。それ故我々は、その仕掛けそのものをもっと追跡しなければならないだろう。

三

さて、今ここにごく普通に観察される事実があるとしよう——ソクラテスが健康状態で酒を飲むならば、その場合、そういうソクラテスにとって、酒はうまい（うまく現われる）、病気をしていて飲むならば、その場合のソクラテスには、にがい（にがく現われる）——

この事実を奥義の仕掛けで説明あるいは翻訳すると、先の場合——なすもの、なされるものはうまさを生んだのだ。それらは同時に二つが一つ組で運動し、そして、感覚はなされるものの方にあって舌を感覚するものとしてしあげ、(ἀπηργάσατο)[12] 他方うまさは酒の方から出、その周囲を運動し、酒を健康なる舌にとってうまいものとして、あらしめ、かつ現わしめたのだ（159cd）——と言われ、後の場合も同様に言われる。

これを見れば、双生児が生まれると、単になすもの、なされるものであった、かの遅き動であるものどもの出会いは、それらが生んだ双生児の急速な運動によって「なされるものは感覚している」、「酒は健康な舌（ソクラテス）にとってうまい」といった命題を結果させる。すなわち、これを逆に見ると、そういう、いかにもそこで感覚があり、と対応していることが立証されたような命題が出来上るまで、動たる子孫は次々と——と言ってよいと思う——生

まれてきて、動きまわると言ってよいと思われる。[13] これが双生児のもつひとつの役目といってよいのではないだろうか（無論、今は予想であるが）。ただしこの急速な動という双生児の役目は、まさに前提されているのであって、この前提に我々が絡んで、どんな速さで動くのかなどと問うても、答は不可能なのである。もし可能とすれば、なされるもの、つまり健康なソクラテス（の舌）が、たちどころに感覚しているソクラテス（の舌）となるほど速いのだ。その飛躍の速さほどだ、という答であろう。[14]

そうするとこの場合これら双生児の親たちであるなすものーなされるものは、あまり主導的なはたらきをしてはいないとも考えられようが、しかしそのことは逆に見れば、双生児が急速に飛躍あるいは跳躍して「知る」ことが発生するためのその跳躍が、そこから可能となるべき親たち――しかもそれは何であるとは言えない――の弾性、およびその弾性を発生させる不可解な動、をこそ重視しなければならぬことを意味するのだとも考えられる。ところでその不可解な動の何たるかを垣間見る唯一の、いわばのぞき窓は、それら親たちがその点で弾性をはらむその所、両者のともに同尺度（シュムメトロン）である出会い、であるからして、我々はシュムメトロンであるとは何を意味するかをも問わねばならぬであろう。今のところその問を保留しておきたい。（四章参照）

他方また、万有の子孫は、それが独特の双生児であることの中に、もうひとつの役目をもつことが見られるであろう。無論双生児であるのはひとつには、ほとんど自明のこととして、両親を変えるためにであるだろう。が、しかしそれでは、なすーなされるという二親を仕掛ける意味の問へと行ってしまい、直接には問えなくなる。直接問うためには、奥義の仕掛けが何故その仕掛けの要求のとおりに、酒とソクラテスについての事実を翻訳しうるかという、その理由を可能とする双生児の独特さを問わねばならないであらう。その独特さとは何か。それを考えてみる。

たしかにこの奥義のとおり、「健康なソクラテスにとって酒はうまく、病んでいるソクラテスにとって酒はにがく現われる」という事実は「健康なソクラテスはうまい酒を感じている（健康な）ソクラテスとなる。病んでいるソク

ラテスはにがい酒を感じている（病んでいる）ソクラテスとなる」というふうに翻訳されることを我々も認めうるだろう。ところがしかし、その翻訳は、――そのように感覚しているもの（οὕτως αἰσθανόμενος）となったならば、最早他のものとなる（他の仕方で感覚している）ことはないであろう。（何故なら、奥義は、他のものには他の感覚があり、（τοῦ γὰρ ἄλλου ἄλλη αἴσθησις）そして当の他の感覚は、感覚するものを、他ようのもの、他なるものとなす（159e～160a）と掟を定めているのだ。）――というこういう条件を満足してのみ、許されるのである。してみると、万有流転論者ですら、もし〝健康なソクラテスにとって酒はうまい〟というような、何かひとつの事実の生じはしていることを承認し、それを翻訳せんとするならば、すでにそのことによって、彼らの翻訳の仕掛けであるところの双生児の組を、ある一定のものとして、また承認せざるを得なくなるであろう。何故なら、もしそうしないと、まさに当の奥義の掟と仕掛けにより、健康なソクラテスは他のように感覚しているものとなり、従って彼にとって酒は他のように現われ、他の事実が生じていることとなり、その事実は生じてもいず、かくて翻訳は失敗することになるから。つまり、感覚がありに対応すると言っても、対応しているためには、また対応するまでは、たとい双生児が急速に運動するとしても、同一であり異ってはならないのである。すると、逆にこう言えるだろう。感覚それ自身がではなく、否まさに双生児の同一性こそが、ありとの対応を決めているのである。そしてその同一性によってこそ、感覚はそのような一定の感覚となりうるのだ、と。ところでしかし、双生児の同一性は、今見たところでは、〝もし彼らが一定の事実の生じはしていることを承認し翻訳せんとするならば〟という仮定に依存していた。では彼らが仮定を我々に与えてくれず、あくまで万有流転を固執したとするならば、どうなるであろうか。無論、奥義の仕掛けは、何ひとつの感覚をも生み出すことは不可能であろう。何故なら、健康なソクラテスと病気のソクラテスとは異り、うまいとにがいは異る、つまりそれぞれが同一性をもっているからこそ、奥義はその掟と仕掛けとによって、感覚のそれぞれとしての発生を語りえたのであるが、しかるに今や何ひとつ同一性がないとすれば、そのような事実と

対応している感覚の成立のための双生児は、どういうものでもない双生児であろうが、しかしその双生児は、最早どのような仕方でも感覚していない感覚を結果させようから。すなわち、たとえ感覚がありと対応しているとしても、それ自らが成立しないのである。してみると、今や逆に、奥義はその仕掛けたる双生児の何たるかを自らでは決定できず、ただ事実の同一性を承認し翻訳することの中にこそ、その働らきがあるのだ、と言わねばならないだろう。従って、なおも万有流転を固執せんとすれば、それは事実を翻訳しないのだという条件においてであろう。クラチュロスは黙って指さしたといわれるが、[15] それは事実を指さすふりをしたのである。人はふりをすることができるのだから。

しかしながら、その出来ごとの同一性とはどういうことであろうか。恐らく「健康であってソクラテスが酒を飲む場合には、いつでもその彼に酒はうまく現われ、病気であればその彼に酒はいつでもにがく現われる」ということの同一性であろう。そしてこの同一性は、健康とは何か、病気とは何かを知った知者によってこそ、普遍的かつ原理的に確かめられるものだといわれるであろう。[16]

さて以上によって、双生児のもつ独特さが明らかとなった、つまり奥義は双生児の動からだけでは、感覚の成立をはかり、そしてありとの対応を目論むことは、不可能であることが明らかとなった、といってよいだろう。そしてまた我々は、生じはしていることが、同時に滅びもしていることであるところでは、ありと対応することはできないのだと、断言してさしつかえないだろう。また、先に見たディレムマをもろともにとった彼らの勇気も、それ故余儀なくされたアポリアも、ひとつは蛮勇、ひとつは無用のものだったのだ、と。

四

とはいえ我々には、シュムメトロンの問題、つまり、なすものーなされるものという二親の問題が先に残されてい

た。これはどう解くことが出来るだろうか。真理論において感覚は知識であると論証されていくのが、我々がそれを逆用して万有流転の感覚説を反駁したところの、〃他のものには他の感覚が〃という奥義の掟が示されたすぐ後からであることを見ると、その論証の中に秘密を解く鍵があると思われる。

我々は今しがた、知るものは出来事の同一性を普遍的かつ原理的に確かめているのだ、と言ったが、そこで、もし『健康』とは何かを知っている知者がいるとすれば、彼は次のような文を作ることが出来るといえるだろう。すなわち、――『健康』とは〃誰であれその人がそういうあり方をしていて酒を飲む場合には、いつでも、酒が、その誰であれそういうあり方をしている人にとって、うまいものとして現はれる（うまい）――（文〔Ⅰ〕）〃そういうあり方である。――と。逆に見ると、彼知っている人は、この文〔Ⅰ〕は、その部分として不定（未知）の要素を含んでいるにもかかわらず、『健康』というあり方を指示しているのだと答えて、未知の部分を解くことが出来るのだ、と言えよう。ところで文〔Ⅰ〕は奥義流に――誰であれそういうあり方をしているものと酒とが接近すると、その場合いつでも、誰であれそのあり方をしている人は、酒をうまく感ずるものとなる（文〔Ⅱ〕）――と翻訳できるだろう。然るに文〔Ⅰ〕文〔Ⅱ〕を合わせて考えると、――誰であれそういうあり方をしている人と酒とが、〃なす―なされる〃という関係に立つ場合には、いつでも、その誰であれそういうあり方をしている人と酒とは、あるいは「―は～を…として感ずる」あるいは「～は―にとって…として現われる」といった形で、今度は、〃として感ずる―として現われると〃いう関係に立つのだ――（文〔Ⅲ〕）――と、彼は解しうるであろう。そうすると、彼は、もし彼自身が健康であるかどうかを推理判断しようと思ったら、そのためには、自分自身にとって酒がうまく現われるかどうか、彼自身の舌で味合ってみるであろう。すなわち、以上をまとめると、『健康』についての知者（ἐπιστήμων 160d₂）の知識は、健康であるものにとって酒はうまく現われても何ら支障はないのだ、と知っているそういう『健康』についての知識なのであって、そしてそのような知者の資格で、彼自身の場合に酒がうまく現われたことを、彼自身の健

康であるかどうかの基準[17]（κριτήριον 178b6）となしたのであり、彼がうまく感じた点で判断者（κριτής 160c8）[18]となったのである、こう言えるであろう。

さてそれでは、感覚は知識であると論証していく文、（一章65頁～66頁における文〔A〕〔B〕〔C〕〔D〕〔E〕）はどうであろうか。今、文〔I〕〔II〕は、文〔III〕の解釈を受容するものであったが、それらはそういうものでありうるだろうか。答は否であろう。すなわち、文〔A〕（65頁9行より11行）から文〔II〕と類比的な文を作ることが出来るであろうが、しかし、その文からパラフレイズできるのは、恐らく――なすものーなされるものは、ただその、〝なすーなされる〟という関係においてのみそれぞれであるが、そういうそれぞれがその結合関係においてなる場合、いつでも、その結合関係において〝現われるものー感覚するもの〟となる――という文でしかないであろう。とすると、相互に結合していることは相互関係においてなることを決めても、決して〝ーは～を…として感ずる〟〝～はーにとって…として現われる〟ということを決めることはできないのであり、ただ、なすーなされるという相互結合から、現はれるー感覚するというそれへと、いわばなり上ったことを我々は見出だしうるのみであろう。この事情は文〔B〕（66頁2行より3行）についても同様であって、たとえ〝他のものがではなく私が〟私をなすものと、なすものーなされるものとして、なすーなされるの関係に立ったところで、〝他のものではなく〟という限定を入れただけでは、決して文〔III〕と等価なパラフレイズをもたらし得ないであろう。何故なら、その場合の私は、ただ、なすーなされるという結合においてのシュムメトロンとしてしか意味をもちえない私であるから。従って文〔C〕（66頁4行より5行）もまた――そのような、なすーなされるという相互関係に立ってこそ私であるところの、その私の、その結合におけるなり（ἡ ἐμὴ ἀνάβασις）は、そういう私にとって真である。何故なら、それは、その時々に私とともに結合関係に立つそのものとの結合からのなり（τῆς γὰρ ἐμῆς οὐσίας）であるから――というようなトートロジーを語るだけである。それ故、それら〔A〕〔B〕〔C〕からの結論であるところの文〔D〕（66

頁5行より7行）〔E〕（66頁7行より10行）は、まさしくそのような私が判断者（κριτής）であること、及びそのような私は、私がまさにシュムメトロンであるという条件で、常に何かと結合していることが保証ずみであること、この二つを、語っていることになるだろう。しかしながらこのことは、先に見た〝知るものという資格で判断者となる〟ということと相容れないのは無論であろう。シュムメトロンとしての私というのは、決して〝知るもの〟としての自らの同一性[19]をもってはいないのであり、それはあたかも、穀物をそれぞれにふるい分ける様々のふるいのようなものであるといえよう。ふるいはたしかにそれぞれの大きさや形をした目でもって、穀物をふるいわけると言われるかも知れない。しかしながらその目の形や大きさを知り、それを用途ごとに用いることが出来るのは農夫であって、ふるい自身は何も知らないのである。我々は、従って、農夫をこそ、ふるい分けるもの（κριτής）と呼ぶべきなのである。

さて、以上によって、シュムメトロンの性格はどういうものかということ、また感覚が知識であるという論証は、単なるシュムメトロン、ふるいのような私、を判断者として仕立てて、これをメトロン（尺度）としての知者にまで連続し拡大させることによって、導き出されたということ、これらのことがほぼ明らかとなったといえるだろう。

35.

しかしながら、問題は先に残されているであろう。シュムメトロンをただちに判断者であるとすることは拒否すべきだとしても、しかしシュムメトロンそのものの問は、依然として残るのではないだろうか。何故？　恐らく、〝しかじかのものとして感覚する―しかじかのものとして現われる〟、ということが成立するためには、少くともそれ以前に、何としてではなくとも、ぼんやりと何ものかに接近する必要が、よしその接近がどのような謎に充ちたものであろうとも、あるからだ、と言えよう。とすると、逆にふたたび、感覚はありに対応しないということそのこと自身

が大切にされなければならないのだといわねばならないだろう。生じはしているということが同時に滅びもしている場面を、今度は我々がどのようにして押さえることが出来るのか。我々はもう一度ふりだしにもどって、ソクラテスの謎に満ちた問そのものの場面に立たねばならない。知識とは何かという問こそが彼のアポリアであったのだから。

かくて、記憶の問題、矛盾律の問題、かの〝共通なもの〟（τὰ κοινά）を心が自分で自分を通じて考察し思考する思考あるいは思いなしの問題等、プラトンが思索しつづけた道程を辿ること、これが筆者に残された次の課題となるのである。

註

(1) 第一部とは、F. M. Cornford; Plato's Theory of Knowledge の分け方に従ってそう呼ぶ。田中美知太郎『テアイテトス』序説も同様である。L. Campbell; The Theaetetus of Plato は、183c までを一区切りにしている。

(2) その独特さとは、知識の例をもって答えるのでなく、端的にひとつのロゴスで知識それ自体を答えることを要求するそれである。cf. 146c～148e

(3) この限定は重要である。「尺度＝人間」論というような一般化された知識説が、どこから成長してくるかを正確におさえる為には、その限定の中に何は入ってこないかという問い方を残しておかねばならないのである。cf. 171de, 178bc. 註(17)参照。

(4) 田中美知太郎 上掲書 375～6 頁参照。知識の必須条件はすでに明らかであって、対話篇の問は、「知識とは何か」にかかるのではなく、「何が知識の条件をみたすか」にかかるのだ、といわれている。

(5) 心や身体が自己を持しているその「持ち」や「持し方」（ἕξις）は、学習や訓練といった「動」によってこそ保全されるのだという議論（153ad）、色は個々の目と相関的に現われざるを得ないのだという議論（153e～154b）、この二つであるが、前者は、プロタゴラス説を弁護するにあたり、プロタゴラスをしてその教育論的―養生訓的見地を、ヘクシスの改良という点で語らしめる時に、再登場する。そして、このような教育者の必要性に知者の存在理由があるとされる。だが、すでにこのことによって、善きものをそれ自体として知るものの、善きものの方向への能動的制作の立場を、予感していると言われるだろう。ただこの問題を原理的に現実化していく思索は、プラトンその人のそれとして『テアイテトス』の主題とひそかに絡みあっていると思われる。プロタゴラスは、いわば患者の真実を声高に語っているといえる。註(17)参照。

(6) 154b～155d 自然学的な生成過程なしに、以前それでなかったものが、今それである、ということの哲学的驚異であるといってよい。『パイドン』95e 以下の原因についてのプラトンの経験と同様、『テアイテトス』の『原因』論であることを決めているであろう。

(7) 感覚がもつさまざまの名があげられているが、視覚、聴覚はおろか、快苦、欲望、恐怖などの情念もそれにあげられている。我々の常識よりはるかに原理的な感覚説であることに注意しなければならない。

(8) 以下、文〔B〕〔C〕〔D〕〔E〕は本稿四章の論考に資する。

(9) 「あり」「なり」の区別は63頁に見られた万有流転論者の強硬さにも拘らず、銘名（ὀνομάζειν）の問題にすぎぬとして、放棄されてしまっているのである。

(10) シュムメトロンであることによって、人は同時に、感覚するもの—思考するもの—知るもの、だとされ、それぞれ独自のもつ区別は解消してしまうのである。これがテアイテトスの「知っているものは知っているそのものを感覚している」という卒直な発言を可能にしているのである。

(11) 同一の眼を、動きが、可能的なあり方から現実的なあり方へと変えたのだ、と解されようが、しかしこの変化はあくまで流転なのだと、彼らはするのであろう。

(12) 前註および註(5)と同様、このことは我々からすれば、ひとつの制作の成就・達成として理解しうるであろう。

(13) 181b～183c においてはじめてこの双生児の動きに焦点が定められて、〝白さそのものの流れ〟があるならば、最早何それであると呼ぶことは不可能、と逆襲され、奥義の仕掛けとして保存されていた役目が剣奪されることになる。首尾一貫させようと思うなら、あくまで何らかの動きでもって、動きのそれとしての動きを確保すべきであったろう。しかし依然自己憧着におちいるのである。

(14) I. M. Crombie は奥義について ① a Realist Theory ② Phenomenalism もしくは Lockeian Causal Theory この二つの解釈が可能だろうとし、②を暫定的にとった上で②の中のそれぞれのもつ困難をあげ、結局その折衷の形で解決を見出だそうとしている。その際プラトンの Causal Theory についての理解の不足を難じているが、『原因』といい『あり』といい、プラトンのいだいた問の深さを思うなら、余りにも性急な非難とはいえないか。ただ、もし一つを取るべきだとすれば、Phenomenalism の線だろう。それは Cromhie もほとんど無意識のうちに認めている線でもある。cf. An Examination of Plato's Doctrines P. 14～26

(15) Arist. Metaph. 1010a$^{12-15}$.

(16) 166c$^{3-6}$ においてソクラテスは、プロタゴラスのよって立つ堅陣を抜くには、もろもろの感覚は我々のめいめいにとって私的に生ずるのではない、たとえ私的に生ずるのだとしても、現われるもの（φαινόμενον, 症状）は、ただそのめいめいにだけ生ずるのではない、と反駁すべきなのだ、こう語っている。

(17) L. Campbell 上掲書 P. 134 の 178b^{6} にたいする註釈によれば、κριτής—κριτήριον として造語されたということである。田中訳では〝かくあるかあらぬかの分かれ目をきめるものは各人自身にあるのであって〟となっているが、要は何処にその在所（ありか）があるかというその場所なのである。それによって 178b$^{5-7}$ の「何故ならば、それら（白いもの、重いもの、軽いもの）のあるかあらぬかの分かれ目をきめるその在所を自分自身の中にもっていつつ、ちょうど彼その人が受けているそのようなものを（それとして…〈cf. Campbell P.135〉）思っているのであれば、彼自身にとっての真であるところのもの、を思っているのだから」の文を考えるならば、「白いもの等々の場合、それらがめいめいにとってそうあるかあらぬかの分かれ目を区切る場所は、そういうパトスを受けるその人の中にあることが、公に承認されている、ちょうど公的な承認によって権威をもつことによって裁判所が裁判所であるように。従って、逆にパトスを受けていれば、まさにその資格で即座に、彼にとってのあるかあらぬかの判断所を自己自身の中に立てているのだ。そして受けているパトスをちょうどそのパトスとして思うならば、正しく判断がなされたわけだ。」という風にパラフレイズ出来るだろう。すなわちここで確かめられてよい点は、①判断所としての κριτήριον は公的に承認されていること。②その承認は、〝受けているちょうどそのパトスをそれとして思う〟ことが正当な判断だ、という条件の下であること。③従ってパトスを受けているのは私的な個人であるとしても、受けていることのあるかあらぬかは公的な問題であること、である。患者は嘘を言わぬ（思わぬ）限りでしか、真実ある一定の病気の患者たりえないのだといえるであろう。

(18) このようにテクストの論証は、κριτής から ἐπιστήμων へと進むそれである。

(19) 〝知るもの〟の同一性とは、プラトンにおいては、知識の不可謬であること、知るものは常に同一の言論をすることなのである。cf. Resp. 339b～341a. Grg. 472bc. 481d～482c. 490c～491d. Alc. I 117b～118c. など。

（第一薬科大学講師　昭和四十二年本学大学院修士課程修了・西洋哲学史）